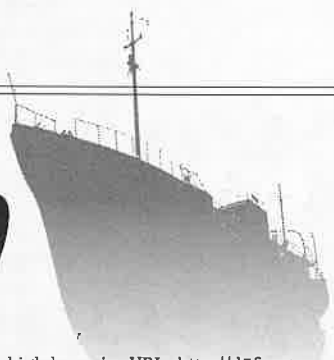


都立 第五福竜丸展示館ニュース

2003.09.02  
No.302

# 福竜丸だより



発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org

## ビキニ水爆・第五福竜丸被災 50周年記念プロジェクトすすむ

第五福竜丸平和協会会長 川崎昭一郎



「図録」掲載写真より「死の灰、静岡大学塩川孝信教授が採取したもの。一九七六年に展示館に寄贈された」

第五福竜丸ビキニ水爆被災五〇周年記念プロジェクトの各企画は、推進委員、ワーキンググループの皆さんの協力により着実に進んでいます。

常設展示については、展示館入口の大漁旗、当平和協会のメッセージ、第五福竜丸の大王写真と投書文「沈めてよいか第五福竜丸」のプロジェクトにつき、「第五福竜丸の被災」、「被害は福竜丸だけではなくあった」、「マーシャル諸島の被害者」、世界の核実験を中心に国際背景にも触れた「年表」、「核兵器廃絶へ人々の声」と来館者のご意見や感想を書き込むコーナー、特別展示「久保山さんへの手紙」の展示などの各パートがきます。

視聴覚コーナーも充実させ、コンピュータ・タッチパネルにより廃船から展示館設立までの歴史を体感できるハンズオン・コーナーも設けられます。

記念出版としての展示館収蔵資料の「図録」については、いま写真撮影が小さなものから大型のものへと順調に進行し

ており、九月中に終了します。「図録」各パートのリード、資料リストとキャプション、解説原稿も九月中に集約の運びで、すでにデザイナーとの打合せ、編集作業などに入っています。

種々の企画展、巡回展についても開催場所、後援者を含め検討・交渉に入っています。展示館内での特別展としては、二〇〇四年二～四月のオープニング展から二〇〇四年一月～二〇〇五年一月の最終展にいたるまで数回分の企画について検討されています。

来る一月二八日は、第五福竜丸平和協会が財団法人として設立許可されて三〇周年に当たります。第五福竜丸展示館オープンの三年前ですが、第五福竜丸の保存・展示事業の公益性が認められ、その安定した基盤がつけられたという意味で大切な日です。一月二九日（土）に記念レセプションを行います。

五〇周年に当たる来年の3・1ビキニデーの記念行事については、新藤兼人監督を招き一九五八年制作の映画「第五福竜丸」を鑑賞するつどいを二月二八日に開催する予定です。

ひきつづき皆様のご支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。

# 第五福竜丸展示館の 役割についての一提言

滝口正樹

昨年(二〇〇二年)、私の勤務校の中学二年生の子どもたちと、中央区立常盤小学校に今も残る防空壕(地下室)を訪ねたことがあった。その時のことを書いてもらった感想文のなかで、ある子どもが、以前に訪問した第五福竜丸のことを重ね合わせ、次のように書いていた。

「戦後五〇年以上たち、戦争を思い出させる物が少なくなってきたなかで、(防空壕が)未だに残っているのはすごいことだと思う。今まで平安地蔵(板橋空襲の供養碑)や戦災資料センターなどには行きましたが、石碑や写真では実感がなかった。

しかし、防空壕や第五福竜丸では目の前に実際にあり、実感どころか、当時の映像、人々の思いなどが目に浮かぶ

できます。」

ちなみに、この子どもは第五福竜丸事件について事前にしっかりと学習したうえで、何人かの仲間とともに、大石又七さん宅へ聞き取り調査にも行っていた。

この言葉は、平和を願う人びとの努力によって第五福竜丸展示館がつくられたことこの限りなく重要な意味を再認識させられる。

と同時に、この言葉は、政府が日本を「戦争のできる普通の国」にしようとしている現実をふまえながら行われるこれからの平和学習のなかで、この展示館がどのような役割を担っていくのかを考えるヒントを提供しているように思う。

そこで、この言葉も一つの手がかりにしながら、これか

らの平和学習のなかでこの展示館が果たす役割について、若干意見を述べてみたい(ただし「50周年記念プロジェクト企画案」に入っているものは除く)。

まず、第一に、「総合的な学習の時間」を利用して「総合学習」として平和学習を行う努力をより一層強め、その一環としてこの展示館を意識的に位置づけることである。具体的には、

① 事前学習として、展示館のホームページを積極的に活用する。

② ①を充実させるために、立命館大学国際平和ミュージアムをはじめ、広島・長崎など全国の平和博物館の取り組みに学んでホームページの改善を図る(掲示板、リンク先の充実も含めて)。

③ 東京都内や近隣の小中学校に総合学習として展示館を利用するように訴える宣伝パンフレットを作成し送付する。

第二に、展示館の展示内容や方法も、「50周年記念プロジェクト企画案」に加え、より世界や日本の現状をふまえ

たものに再構成し、とくに子どもたちに「人々の思い」が伝わるように、また、学習しやすい「参加型」になるよう改善を図る。

たとえば、劣化ウラン弾と子どもたちへの被害、最先端の核兵器開発の現状とNGO活動なども含めた多様な核兵器廃絶の取り組みの紹介、日本の原発政策や原発事故とのかわりの展示、大石さんのマッシュアル訪問時のビデオなどの上映、小・中学生用ワークシートやクイズ、さらに可能ならばビキニ事件50周年記念のアニメ制作など。

第三に、大石さんをはじめ、第五福竜丸関係者の「思い」を子どもたち自身が受け止めるような学習の機会をつくり(大石さんなどのビデオの貸出し・普及も含め)、それを同世代の子どもたちや保護者・地域・大人社会に子どもたち自身の言葉で発信していく活動(社会参加)に積極的に取り組むことである。

平和学習という点、一般的にはまだまだ「折り鶴」を折って、平和を「願う(祈る)」活動が定番になっているよう

な気がするが(もちろんそれ自体大切だが)、これからは「世界の子どもの平和像」づくりの経験にも学び、子どもたち自身で「平和を創る」平和学習に重点を移すことが大事だと思う(とくに中学生にとって;)。

第四に、「愛吉・すずのバラをひろめる会」と京都・綾部の山室建治さんらの「アンネのバラ」を意識的につなげるなど、平和学習・運動のネットワーキ化を模索する。そして、最後に、「50周年プロジェクト企画」と合わせ、これらの取り組みをすすめるための特別募金活動をすすめる。

これからも第五福竜丸展示館の活用の輪をひろげてゆきたい。(板橋区立高島第二中学校教諭)

被災漁船にかんする資料、  
事件当時の回想手記を募集

平和協会は、ビキニ水爆  
実験五〇年にむけて、被災  
船に関する資料・情報や当  
時の市民の体験や回想の手  
記を募集します。展示館ま  
でお寄せください。

## 大石又七著「ビキニ事件の真実」

ビキニ被災事件の全体像に迫る  
記念すべき記録

岩垂 弘

出るべき時に出るべき本が出た、というのが本書を一読しての感想である。ビキニ被災事件が起きてから、来年（二〇〇四年）三月一日で五〇年を迎える。この記念すべき節目を前にして、出るべき本が出た、と心から思う。また、「ビキニ被災事件から五〇年」を考える上でタイムリーな出版であり、内容もまたそれにふさわしい。

ビキニ被災事件とは、一九五四年三月一日、太平洋のビキニ環礁で米国による水爆実験が行われ、静岡県焼津港所



と比べられないほどの重みと重要性とリアリティーをもつ。

しかも、大石氏は「あとがき」で「俺が知っている部分だけは、ありのままに伝えた。そして誤解を招かないためにも抽象的な言い方を避け、率直に書くようにした」と述べているように、同氏は事件の全容、その後、大石氏個人とその周辺で起きたこと、他の乗組員がたどった軌跡、政府や自治体や運動団体、地域社会の対応などを極めて率直に、時にはこんなにストリートに書いていいものかと思うほどの言い方でつづっている。それだけに、記述に迫る力があり、問題点の指摘は鋭さを増し、読者に強い印象を残す。

それに、読者にとってありがたいのは、本書がビキニ被災事件に総合的な視点から迫っている点だ。これまでのビキニ事件関係の文献といえど、どちらかというと、各論的なものが大半であった。それらは、いうならば、三つに分類できた。米国のビキニ水爆実験を科学的、軍事的に解

明したものの、福竜丸乗組員による被曝の体験記、被曝したビキニ環礁周辺島民に関するルポルタージュ、といった具合だ。だから、事件の全体像を把握するには、これらを併せて読む必要があった。

しかし、本書はこれらを包含する、いわば集大成した内容となっており、事件の概要がスムーズに頭に入ってくる。こうなったのも、著者が「事件の全体像を知るために、目に入らなかつた裏側の当時の証言や記録、資料などに目を通し、自分の記憶や体験と照らし合わせながら拾いあげてみた」（あとがき）からだろう。

著者はさらに続ける。「驚くようなたくさんの事実が浮かび上がってきた。点と線がつながる。そのたびに驚き、怒った。記録や証言の中には、多少の違いはあるかもしれない。しかし全体像は読み取れる」。多くの資料、記録に目を通した著者の努力は報いられたと言える。

ともあれ、読み終わって、「半世紀たった今も、ビキニ被災事件が引き起こした問題

はいまだに解決していないのだ」という、やりきれない思いが脳裏に沈んでいくのを覚えた。核兵器は廃絶されるどころか、新たな開発と拡散の時代を迎え、むしろ、危機は深まるばかり。元乗組員への補償と援護もいまだに全く手づかずのまま。周辺島民もいまだに後遺症に悩む。まさに「ビキニ事件はまだ終わっていない」（著書）のだ。

気になったことが一つ。福竜丸乗組員の被災を「被曝」としている点だ。従来から、ジャーナリズムや学会では福竜丸関係の被害を「被曝」としてきた。「被曝」とは、爆風、熱線、放射線という三つの要素を伴った被害であり、放射線による被害は「被曝」とされてきたからである。もし、著者が敢えて「被曝」という表現にこだわるのであれば、それについての説明がほしかった。著者は「事件の語り部」として若い世代に強い影響力をもつだけに、一層そう思う次第だ。（みすず書房刊。定価二六〇〇円＋税）。

（ジャーナリスト、第五福竜丸平和協会評議員）

## 2年目の小学生イベント開催

昨年の夏休みに初めて試み好評だった小学生の夏休み教室を今年も開催しました。

一回目は7月24日(木)に開かれ、「第五福竜丸で放射線を知ろう!はかるう!感じよう!」とのテーマで10名の小学生が参加しました。遠くは大阪から、近くは展示館に一番近い辰巳小学校の6年生も参加。

最初に「第五福竜丸についてのお話」と船の見学、そして物理学者で平和協会顧問の服部学先生から、「分かり易い放射線のお話」を聞きました。つづいて、実際に放射線を測って感じてみようということで、簡易測定器「はかるくん」を操作して、思い思いの場所、船体や死の灰、展示館の建物や線源の石などを測りました。

感想文には、「こんなに身の回りに放射線があるとはおもわなかった」「放射線が全部ダメなわけじゃないことがわかった」「核実験はやめてほしい」などの感想が寄せられました。



線源の石を測る参加者

小学生教室の2回目は8月28日(木)に「牛乳パックでつくろう第五福竜丸」がおこなわれ、12人

の小学生が参加。

ボランティアの会メンバーの手引きで工作に取り組み全員が仕上げて仮設プールで「進水式」をおこないました。



## 歴史教育の全国大会に参加

展示館への小中高校の団体見学は、昨年は、459校約4万人でした。展示館が学校教育のなかで生かされ、平和の学習や社会や歴史教育にも役割を果たしていると思います。

そこで、高知県で開かれた歴教協の全国大会に、私、遠藤と協会の安田事務局長の2人で参加しました。高知はビキニ事件で被災船を多数出した地域です。その調査にとりくまれた先生方とも会い、収集した資料などを再整理することなども相談しました。

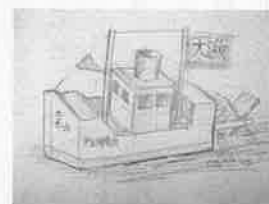
大会は、社会科の先生方を中心とした実践報告や研究の成果の発表・討議・交流の場です。全国から集う先生方に、第五福竜丸展示館の存在とビキニ事件の社会的歴史的重要性を伝え、展示館に来てもらいたいと訴えました。

ほとんどの教科書にはマグロ検査や第五福竜丸の写真は掲載されていますが、先生自身が魚騒動や放射能雨パニックを体験した人はもうほとんどいません。私たちは、

平和の分科会と世界認識の分科会でそれぞれ手分けをして発言しました。

その発言を聞いた神奈川の教員の方から県の民間教育研究集会の平和の分科会での報告の依頼をうけました。

8月23日、三浦三崎で開かれた研究集会では、展示館での生徒に向けての説明の様、特に船の実物を目の前にしての説明や資料の展示を見ての生徒の反応や小中学生と行っている夏休み教室などの活動を紹介しました。これからも機会を捉えて、展示館の活動を知ってもらいとりくみをしていきたいと思えます。(遠藤昌樹・ボランティアの会世話人)



## 夏の展示館から

\*7月21日、ワシントンの高校生と受け入れの日本の高校生、大学生25名が来館。川崎会長の案内で見学後懇談しました。

\*8月31日、今年2回目のエンジンへの薬品塗布の作業が埼玉の高校生、大学生のボランティアによりおこなわれました。

\*8月25日、立命館大学国際平和ミュージアム友の会メンバーが、安齋育郎館長とともに来館しました。